

●中学生の部

環境大臣賞米岡 芽生 よねおか めい

オスのシーズー犬、ギータは私が小学校四年生の時、十七歳半で亡くなった。ギータは私の初めての友達である。犬の平均寿命は身体の大きさにもよるが十から十四歳なので一般的には長生きだったと思う。

日本では犬や猫を買うのが簡単で近くのペットショップに行き、数十万円を払えば可愛い子犬や子猫がもう自分の物になる。ではその時に、今目の前にいる子が十数年後には老犬や老猫になる事、そして同じように自分も十何歳年を取り、生活環境が変化していく事をしっかりと想像出来ている人はどれだけいるのだろうか。難しい事だと思う。私だって目の前の可愛くて小さな生き物に夢中でそんな想像出来ないだろう。けれどもそうやって簡単に飼えてしまう結果、今なお年間十万頭以上の動物が廃棄され、その内四万頭以上が殺処分されている現実があるのだと私は考える。そこで生き物の一生を背負うという事についてギータの生涯を通して具体的に考えていきたいと思う。

まず初めにギータは母が独身の時にペットショップで買った犬である。母はどうしても犬を飼いたかったが、仕事で日中家には居ない事もあり、一年程悩み、犬についての本を読み、比較的留守番に強く一人遊びが得意な犬種のシーズーを選んだそうだ。寂しがり屋の犬や長い散歩を必要とする犬は選択肢から外したという。

数年後母は結婚し、その相手である父が突然海外転勤になった。そこで赴任国であるアメリカの動物検疫のルールを調べ、入念な準備をして、ギータも一緒に太平洋を渡る事になる。短鼻種の犬にとって、貨物室での旅は辛く、家族と離されて不安だっただろう。

そしてアメリカの生活に慣れた頃、ギータ最大のピンチともいえる私が誕生する。すぐにハイハイをするようになった私はギータを追いか回り、尻尾や耳を引っ張るので、私との写真の中のギータはとても嫌そうな顔をしている。けれども私が寝ている写真にはいつでも寄り添って寝ているギータの姿がある。

ここで少しお金についての話をしたい。あまり病気をしない健康なギータだったけれども、アメリカに居る頃、尿道結石になり手術をし、その費用は三十万円を超したそうである。また亡くなる前の半年は病院通いが続いたので毎回一万円以上の治療費がかかっていた。転勤時に家族分の渡航費は会社で補助されるが、犬は補助されない。機内食も出ないのに飛行機代が人間より高かったと母は笑っている。家を借りる際は保証費が余計にかかるし、トリミング代は父の床屋代の倍以上かかっていた。

さて、海外勤務も終わり帰国したギータは八歳になっていたが、まだまだ元気で散歩中に年齢を言うと、いつも若々しくて驚かれていたのを思い出す。様子が少しずつ変になってきたのは十六歳位の頃で、トイレの失敗が増え、夜中に悲しそうな声で鳴き、家の中を同じ方向にぐるぐる歩き回るようになった。認知症の初期症状である。そこで母は仕事を一旦辞めて家でギータと過ごす事を選択した。昼夜逆転の生活が続いた十七歳のある日、けいれんして倒れたギータは動物病院で今夜が山です。と言われる。獣医師の対応に納得がいかなかった両親は、新しく近所に出来た病院にその足で連れていき、そこで緩和治療を続け、半年後、家族全員が家にいた日曜日に静かに息を引き取った。

このように犬の一生は長くその間に飼い主の生活環境は大きく変化し、想定外の費用は随時発生する。だから目の前の子犬を飼いたいと思う人は、何があってもその子を育て、看取るという覚悟をしっかりと持つべきである。そしてそれが出来た人だけが、ペットと暮らすという最高の幸せを享受する資格があるのだと私は考える。